

カンボジア年代記と口承伝承  
——チャン・リエチエ王像をめぐる——

北 川 香 子

ポスト・アンコール期<sup>(1)</sup>カンボジア史の研究は、非常に立ち遅れている。研究を妨げている最大の要因は、史料の不足である。ほとんど唯一の史料である年代記は、18世紀末以降の編纂物であり、その信憑性が問題視されてきた [3:67,18:2,17-24]。従来の研究態度は、年代記の記述を無批判に歴史叙述に使用するか、全て否定するかのみであった。

このような研究状況に不満を感じたヴィッカーリーは、年代記諸本の詳細な内的批判を行うことによって、年代記の史料的价值の評価を試みた。ヴィッカーリーの結論では、16世紀のアン・チャン Ang Cand 治世以降に関する記述には信憑性があるが、それ以前の時期に関する記述は全くの虚構であるという。このような差異が発生した事由として、ヴィッカーリーは、「プレ・ノン pre-Nong 年代記」の存在を想定した。すなわち、「プレ・ノン年代記」は、本来アン・チャン治世から記述を開始するものであったのに、18世紀末～19世紀の年代記編纂時に、17世紀以降に関する記述からの創作、口承伝承 oral tradition および外部史料の採用によって、14世紀から記述を開始するように改変されたというのである [18:89,116,293-296]。

このヴィッカーリー説は、マック・プアン Mak Phoeun が幾ばくかの反論を試みている以外 [11:21-24]、全く無視されてきた。マック・プアン自身は、カンボジア年代記の信憑性を強く主張しているが、ヴィッカーリーの主張を覆すほどの根拠は提示できておらず、彼の論証過程に見られるいくつかの誤りを指摘したに止まっている。

ヴィッカーリー説が、カンボジア史研究の上で非常に重大なものであるにも関わらず無視されてきた背景には、年代記を使用しない限り、ポスト・アンコール史の叙述は不可能であるという事情がある。

しかしながら、ポスト・アンコール史研究を進めるためには、ヴィッカーリー説を無視したままではいられない。本論では、ヴィッカーリーが16世紀以前の年代記の信憑性を損なう事由としている①伝承の混入、②後代の記述からの創作に検討を加え、ヴィッカーリー説の妥当性を問い直してみたい。年代記史料は、①ガルニエ Garnier 訳、②バンコク写本、③ムーラ Moura 訳、④V J 版の4種類を用いた<sup>(2)</sup>。この4つを使用することによって、19世紀以降のカンボジア王権が編纂させた、3版全てに検討を加えることができる。①は1818年にアン・チャン王が編纂させたノン Nong 版年代記のフランス語訳で、1871～72年に出版されたものである。②は1878年にヌパロット Nupparot 王子が編纂した版の写本で、バンコクの国立文書館に所蔵されていたものである<sup>(3)</sup>。③は1878年以降に編纂されたと考えられる編者不明の版を、ジャン・ムーラ Jean Moura が1883年にフランス語訳して出版したものである。④は1903年にノロドム Norodom 王がオクニャ・ヴェアン・チュオン Okña Veang Cuon に編纂を命じ、1934年2月に出版された<sup>(4)</sup>。

## 1. 伝承と年代記の記述の比較

ヴィッカーリーは、年代記の信憑性を損なう大きな要因として、伝承の混入を挙げた。しかし、ヴィッカーリーが伝承であると判断したのは、地名の起源譚や、明らかに超自然的な記述のみであり、実際に伝承を採集して年代記の記述と比較する作業を行っていない。また、伝承であるが故に虚構であるとして切り捨ててしまう研究態度も、あまりにも短絡的であるといわざるを得ない。むしろ、年代記に伝承が混入している可能性があるならば、伝承の要素も積極的な研究対象とすべきではなかろうか。本章では、実際に採集した口承伝承と年代記諸本の記述との比較を試み、これらと口承伝承の間には、どのような関係が認められるかを明らかにする。

## 1-1. トンレ・サーブ南西岸地域の概観

ヴィッカーは、年代記V J版の編者がロンヴェーク Longvekの出身であるため、年代記編纂にあたって、故郷であるトンレ・サーブ南西岸地域の伝承を採用した可能性を指摘している [18:39-41]。筆者は、1999年2月にコムボン・チナン Kompong Chnang 州とポーサット Posat 州で現地調査を行い、口承伝承を採集した〔表〕。

フランス植民地当局が1905年に作成したコムボン・チナン地誌は、その領域を、①浸水する低い地区、②中間の地区、③森の地区、④山の地区の4つに分類する [2:24]。同じく1906年のポーサット地誌も、その領域を、①湖に近く、低く、浸水する地区、②米作に向く中間の地区、③プノム・ポーサット (Phnom-Pursat) またはプノム・クラヴァン (Phnom-Kravanh) と呼ばれる南の山の地区 [12:7] の3つに分けている。それぞれの景観を見ると、この地域は、①ほとんど人の手が入っていない、雨季に浸水するトンレ・サーブ周辺の低地、②疎林の中に人の居住地と水田が点在する中間地帯、③人の居住を拒む森と山が、トンレ・サーブの岸から帯状に推移している。1905年の人口調査によると、コムボン・チナンでは、ロヴェーク (Lovek=ロンヴェーク)、ロリエブ・イエ (Roleapeir)、バボー (Babaur=バリボー Baribor) の3地方の人口が、トンレ・サーブ河に沿って25~30kmの帯状に分布し、その背後の人口密度は急速に希薄になる [2:22]。ポーサットは、ポーサットとクラコー (Krako) の2地方と、「高い地区」に置かれた行政ポスト (poste administratif) から成っている [12:56]。ポーサットとクラコーを併せると、ロヴェークあるいはロリエブ・イエに匹敵する人口規模になるが、「高い地区」はわずか5村落、「カンボジア人」2,110人の人口しか持たない。

コムボン・チナンの領域は、南北にトンレ・サーブ河が貫き、コムボン・トム Kompong Thom、プノンベン Phnom Penh、ポーサットを水路で連絡する。プノンベン、ポーサットとは、陸路でも結ばれている [2:3]。この陸路は、乾季には牛車や馬で比較的快適に旅行できるが、雨季の最初の雨で損傷して使用不可能になったので、

フランス保護領時代に幅6mの道路建設を行った[2:16-17]。これが現在の国道5号線の原形である。フランス保護領以前から、この地域には、「プラウ・クラオム Phlau-Ekrom=低い道」、「プラウ・カンダール Phlau-Ékandal=中の道」、「プラウ・ルー Phlau-Éleu=高い道」の3本の陸路があり、特に「プラウ・クラオム」は「プラウ・ルオン Phlau-Luong=王の道」とも呼ばれ、当時最大の街道でもあった[14:77-79]。ポーサット、バリボーの中心地プサー Phsar と王都ロンヴェーク、ウドンは、この「プラウ・クラオム」とトンレ・サープの支流が交わる地点にある。

## 1-2. ポーサットの伝承

### 1-2-1. プラサートまたはチェダイの由来

アンコール期のトンレ・サープ南西岸地域に関する研究は未だ行われていないが、1999年2月の調査で、ワット・ポー・ミエン・ボン Vat Po Mean Bon 【M1:M-19】<sup>(5)</sup>、ワット・バ・カン Vat Ba Kan 【M1:C-13】、ワット・プレア・ティエト Vat Preah Theat 【M1:U-4】には、アンコール期のプラサート prasat（神殿）遺構が存在するのを確認した。このうちワット・ポー・ミエン・ボンとワット・プレア・ティエトは、王族の遺骨を納めた場所であるという伝承を持つ。ワット・ルオン Vat Luong 【M1:L-21】にはプラサートが存在しないが、代わりに同寺本堂の南東角にあるチェダイ cedey（仏塔）が、王子の遺骨を納めたものであると言われている。またワット・バンティエイ・デイ Vat Banteay Dei 【M1:T-17】、ネアク・ター・クレアン・ムアン Neak Ta Khleang Muang 【M1:N-16】で得た伝承では、バ・カンには王宮があったという。

V J 版によると、1527年亥年にチャン・リエチエ王は、兄のソコンナボットと甥のヨス・リエチエ Yos Reacea の遺骨を納めるチェダイをワット・バ・カンに建てた[6:143-144, 17:185]。後に王は、バンティエイ・ミエン・チェイ Banteay Mean Cey の不思議な菩提樹の傍にチェダイを建て、チャウ・ポニエ・オン Cau Poñea Ong 王子の遺骨を納め、寺を建て、チャウ・ポニエ・オンのキンマ入れ

から金の仏像を作った。この寺をワット・ポー・ミエン・ボン（威力ある菩提樹の寺）と呼ぶ [6:157,17:201]。

バ・カンのエピソードは、V J 版以外には含まれていない。他方、ワット・ポー・ミエン・ボンの菩提樹とチャウ・ポニエ・オンの遺骨のエピソードは、ガルニエ訳 [5:351] とバンコク写本 [16:75-76]、ムーラ訳 [13:44-45]にも現れる。ただし、年代には異同があり、ガルニエ訳ではサカ暦<sup>(6)</sup>1477年（1555年）、バンコク写本でもサカ暦1477年、ムーラ訳では1534年、V J 写本では申年（1536年）となっている。

### 1-2-2. 威力ある菩提樹

ポーサットのワット・ポー・ミエン・ボンで採集した伝承に拠ると、同寺にはかつて菩提樹の木があったが、この木はストウン・ポーサット Stoeng Posat を遡って、バ・カンまで漂って行った。バ・カンは元々バーン・カー Ban Kar（ことが成就する）といい、後にバ・カンと変わった。前述のレジダンス地誌にも、バ・カンに関わる伝承として、同様の物語が記されている [12:48]。

類似のエピソードと考えられるものに、バンティエイ・ミエン・チェイにあった菩提樹の枯木が、チャン・リエチエ王の対シャム戦の吉兆として蘇ったという記述が、年代記各本に見られる [5:351, 6:152-157,13:44,16:75-76,17:193-201]。

### 1-2-3. ネアク・ター・クレアン・ムアン伝承

ポーサットのネアク・ター・クレアン・ムアンに関する伝承は、ワット・プロサッタ・ケー、ネアク・ター・クレアン・ムアン、ワット・ポー・ミエン・ボン、ワット・バンティエイ・デイ、ワット・スリヤー Vat Suriya [M1:R-20] で得られた。オクニャ・クレアン・ムアン Okña Khleang Muang はシャムと戦った將軍であり、彼が井戸に身を投げてトアブ・クマオチ toap khmaoc（幽霊軍）を呼んだため、シャム軍は疫病に悩まされて撤退したという伝承である<sup>(7)</sup>。ポーサット地誌にも、バンティエイ・チェイの伝承として、

類似の人柱伝承が採録されている。ただし敵はシャム軍ではなく、  
篡奪者コーン<sup>(8)</sup>である [12:43]。

クレアン・ムアンのエピソードは、V J 版には現れるが、ガルニ  
エ訳、バンコク写本、ムーラ訳には見られない。V J 版のター・ム  
アンはバ・カンの長者であったが、槍を植えた穴に身を投げて幽霊  
軍を呼び、チャン・リエチエ王を助けて篡奪者コーンと戦った [6:  
125-129, 17:160-165]。すなわちクレアン・ムアンのエピソードは  
V J 版に独自のものであるが、これに先行するポーサット地誌と同  
様のモチーフの伝承が採録されていることから、ポーサットの口承  
伝承がV J 版に先行することが明らかである。

### 1-3. バリボーの口承伝承

#### 1-3-1. ワット・プレア・ヴィヒア・ルオン

バリボー Baribor のワット・プレア・ヴィヒア・ルオン Vat  
Preah Vihear Luong 【M2:I-11】で採集した伝承に拠ると、同寺の  
プレア・アン・プレア・プノル Preah Ang Preah Phnol 仏は、シャ  
ムの王子プレア・チャウ・ノリエス Preah Cau Noreas が建てたも  
のであり、戦乱を予知する力を持っている。同寺の場所がかつてプ  
レイ・ンゴングイ Prei Ngo ngui (眠い森) といい、不思議と眠  
くなったという。この場所の威力のために、昔は車や妊婦が寺の前  
を通ることは忌避された。また同寺には、チョンハン・ホイ Conghan  
Hoy (湯気立つ飯) というトゥーク・ンゴー Tuk Ngo (レース・ポー  
ト)の舳先から作られた仏像があった。昔、僧侶は、チョンハン・  
ホイ船を使ってアンコール・ワット Angkor Vat まで托鉢に行っ  
ていたが、戻ってきても飯がまだ湯気を立てていた。ある日チラム  
cram 魚 (鮫のような大魚) がこの船を破壊し、舳先がバリボーに漂  
着し、船尾がシエム・リエブ Siem Reap に漂着した。船材になっ  
たのはコーキーkokiの木で、元々はマオンMaongから流れてきて、  
コムボン・ルンテァッ・バンKompong Ronteah Bañ に漂着し、  
トロペアン・コンチエンTropeang Konceanを通り、ロムレチRom  
lecまで来て沈んだ。同様の伝承はワット・アイン・テープ Vat Ain

Tep [M2:H-8] でも採集され、付け加えて、チョンハン・ホイ船の船尾はシエム・リエブのワット・クロポム・チューク Vat Kropom Chuk で涅槃仏に作り、ワット・プレア・ヴィヒア・ルオンでは立像にしているという。

このチョンハン・ホイ船のエピソードは、V J 版 [6:130,144,17:166]とムーラ訳 [13:42-43]に見られる。チャン・リエチエ王がポーサットからバリボーに移ったとき、高僧からチョンハン・ホイ船を献上され、サライ・アンダエト Saray Andaet (浮き藻)と命名した。後にこの高僧からプレイ・ンゴングイ地区に寺院を建立するよう求められたので、サライ・アンダエト船から仏像を作り、寺をワット・プレア・プット・リエイ・レェアカナ Vat Preah Put Leay Lakkhana (素晴らしい仏の寺)と命名したという。さらにV J 版とムーラ訳には、後代のチェイ・チェッタ王が仏像を作り、ワット・プレア・プット・リエイ・レェアカナに納めたとも記されている [10:139,13:58,17:355]。

ガルニエ訳とバンコク写本にも、チャン・リエチエ王がスロック・アムリエムキルンポピエ Srok Amreamkirunbopea (バリボー) にアタラス Adtharas 仏<sup>(9)</sup>を建てたという記述がある [5:348,16:74]。しかしプレイ・ンゴングイやチョンハン・ホイ船のエピソードはない。

### 1-3-2. バリボーの起源

ワット・アイン・テープで得た伝承では、バリボーという名はソムボー Sombor (豊か)に起源する。この地方は水不足に悩むことが無く、米が豊富でコムボン・トム Kompong Thom にも輸出している。またチェイ Cey という人物がトンレ・サーブに田を作ったこともあるという。

V J 版では、田を開いたのはチャン・リエチエ王の事績とされている。王は2組の姦通を犯した妊婦と相手の男性を人柱にし、堤防を築いて川筋を変えた。その結果、商人たちが川を行き来するようになり、家々が建ち、市場ができ、ストウン・プサー Stoeng Phsar

(市場の川)という名が生まれた<sup>(10)</sup>。さらに川の下流では、王が軍勢 (re pol) に命じて乾季田を作らせ、1乾季の間に多くの米を倉庫に納めることができた。このため、王はアムラック・キリンポーの名前をバリポー (豊富) に変えた [6:133-134,17:170-171]。このエピソードはガルニエ訳およびバンコク写本、ムーラ訳にはない。

### 1-3-3. シャムの捕虜

ワット・プレア・ヴィヒア・ルオンとワット・アイン・テープで採集した伝承によると、ワット・プレア・ヴィヒア・ルオンのプレア・アン・プレア・プノル仏を建てたシャムの王子プレア・ノリエスは、プレイ・ンゴングイでクメール軍に敗れ、帰国できなかった。またワット・プレア・ヴィヒア・ルオンに仕えるボル・プレア pol preah (寺院の隷属民) の村があり、この村の住民が話す言葉はシャム語のようで聞き取りづらいという。村の名はアンチエン・ルン Ancean Rung [M2:C-14] という<sup>(11)</sup>。

V J 版では、シャムの捕虜をバリポーの寺院に与えたのは、チャン・リエチエ王、スレイ・ソリヨポワ Srei Soriyopor 王とチェイ・チュッタ王の事績になっている。スレイ・ソリヨポワ王はチェイ・チュッタ王の父である。(1) 1536年にチャウ・ポニエ・オン率いるシャム軍を破ったチャン・リエチエ王は、シャム人捕虜の一部をポーサットのプノム・チャンカン Phnom Cangkang の近くに住ませ、他の一部にバリポーのワット・プレア・プット・リエイ・レエアカナを守らせた [6:157,17:200]。(2) 1580年に、スダチ・モン Sdec Mon (モン人の王) のハンサワデイ国 Hangsavaddei の軍がシャムを攻め、シャム王はカンボジア王に助けを求めた。カンボジアのソター Sotha 王は、弟のスレイ・ソリヨポワを派遣したが、ソリヨポワはシャムの王子プレア・ノレン・ソーと諍い、シャムの領土の端にいたシャム人の家族を攫ってロンヴェークに帰った。王はこのシャム人たちをバリポーに住ませ、彼らを監督し守るニエイ neay (長) を任命した [6:181-184,17:232-236]。(3) 1621年には、シャム王タイ・ナー Thai Na が海陸両道から攻めてきた。チェイ・



チェッタ王はシャム軍を破り、シャム人捕虜の一部をアンチエン・ルン Ancean Rung に住ませ、ワット・プレア・プット・リエイ・レェアカナの世話をさせた。またヴォンサー・アンチット・ムーン・スナエハー・チャクレイ Vongsa Ancit Mun Snaeha Cakrei を彼らの長に任命し、トンレ・サーブで生業に就く rok si 許可を与えた [10:132-139,17:347-355]。ムーラ訳にも類似のエピソードがある。それによると、シャム軍とクメール軍はバリボーで会戦し、敗れたシャム軍の一部がプレア・プット・リエイ・レェアカナに逃げ込んだ。彼らはここで捕らえられ、寺院と僧院を守るための人員とされ、先の戦争で捕らえられたシャムの捕虜とともに、大湖(トンレ・サーブ)で漁をさせられた [13:58]。

ガルニエ訳ではサカ暦1502年辰年(1580年)のソター王 [5:354]、1543年(1621年)のチェイ・チェッタ王による「チャンカンのシャム」[5:362]と、2回のシャム人捕虜獲得の記述がある。バンコク写本では、サカ暦1462年子年(1540年) [16:75] とサカ暦1477年(1555年) [16:75] のチャン・リエチエ王、サカ暦1492年午年(1570年)のバロム・リエチエ Barom reacea 王 [16:76]、サカ暦1543年酉年(1621年)のチェイ・チェッタ王による「チャンカンのシャム」[16:84]と、4回のシャム人捕虜獲得が記されている。このように年代記各本には、チャン・リエチエ王からチェイ・チェッタ王の治世にかけて、シャムとの戦闘および捕虜の獲得に関する記事が多く含まれているが、これらのシャム人捕虜をバリボーのポル・プレアに結び付けているのは、V J版とムーラ訳のみである。

#### 1-4. シャムから帰国した王

シャムから帰国したクメール王の伝承が採集されたのは、ワット・ヴィヒア・ルオン、ネアク・ター・クレアン・ムアンであった。ワット・ヴィヒア・ルオンは建立者がシャムから帰国した王であり、ネアク・ター・クレアン・ムアンはシャムから帰国した王を助け、シャムと戦った将軍がネアク・ターに化したものであるという。双方の伝承のモチーフは同じで、シャム軍が侵攻してクメール王を殺し、

妊娠していた王妃を連れ去り、王子がシャムで生まれ、象舎で育ち、スダチ・ドムレイ・ソー Sdec Domrei So (白象王)を捕らえに行く  
とシャム王に偽って帰国するというものである。ネアク・ター・ク  
レアン・ムアン伝承では、シャム王の名がコーン、彼に殺されるク  
メール王がチャン、その王子がウテン Uten で、ウテンは後にチェ  
イ・チェッタという名でロンヴェークの王位に就く。

V J 版では、「白象王を捕らえに行く  
とシャム王に偽って帰国する」というモチーフが、チャン・リエチエとチェイ・チェッタがシャムから帰国する際のエピソードとして、2回現れる [6:121-125,10:99-109,17:154-160,313-322]。ムーラ訳でも、チェイ・チェッタ帰国のエピソードとして、「白象」の物語を載せる [13:57]。しかし、チャン・リエチエの亡命先はポーサットで、シャムから帰国するエピソードはない [13:41]。

## 1-5. ロンヴェーク、ウドン

### 1-5-1. ロンヴェークのトロラエン・カエン仏

V J 版には次のような記述がある。チャン・リエチエ王は、コーキーの木の枝に大きな石塊が載っているのを発見し、この木で仏像を作らせ、顔を四方に向けるよう、背中合わせに十字型に配置した。また石塊で仏像の足を載せる台座を彫った<sup>(12)</sup>。1530年寅年、王はこの仏像を納めるワット・トロラエン・カエン Vat Trolaeng Kaeng (四面仏の寺)を建てた。さらに、ワット・プレア・アイン・テープ・ニムット Vat Preah Ain Tep Nimut (インドラ神の寺)、別名ワット・プレア・アイン・テープ Vat Preah Ain Tep も建てた [6:149-150, 17:191]。

ガルニエ訳、バンコク写本ではサカ暦1450年子年 (1528年)、ムーラ訳では1529年に、チャン・リエチエ王が、足が石でできた4体の仏像とトロラエン・カエン寺をロンヴェークに建てたという記述がある [5:348-349,13:43,16:74-75]。

ワット・トロラエン・カエンはロンヴェークの土城壁の中央に位置する寺院であり、現在も四方を向いた4体の仏立像、4対の石の

仏足がある。エモニエによると、19世紀末当時、ワット・ブレア・アイン・テープの建物は壊れてしまっていた。簡素な藁屋根の下に、体の上部は砂岩、下部はラテライト製で、爪と顔は金箔で覆われ、蓮の花の上に足を組んで座った仏像だけが残っていたという[1:224]。

V J版では、ロンヴェークの仏像とネアク・ター・クレアン・ムアンには、シャムに対抗する不思議な力が宿っていることになっている<sup>(13)</sup>。(1)辰年(1592年)にシャムの侵略を受けたとき、ソター王がワット・ブレア・アイン・テープのカーイ・サット Kay Set 仏とネアク・ター・クレアン・ムアンに7日間祈ったところ、シャム軍は食糧が尽き、兵士の間に病気が流行って撤退した [6:188-189, 17:243-244]。シャム王ブレア・ノレン・ソー Preah Noren Sor は、彼の侵攻を妨げたカーイ・サット仏を破壊するために、魔術に長けたテッカパニョー Tekkapañño、スパニョー Supaññoという2人の僧侶を送り込んだ。彼等は飢饉と疫病を蔓延させた上で、災害の原因は仏像であるとソター王に告げた。王はトロラエン・カエン仏を寺の北の池に捨て、カーイ・サット仏はチュローイ・バン・レアット Croy Ban Lah に沈めた。別の説では、怪僧達は仏像を燃やし、ワット・アイン・テープの仏像も壊そうとしたが、カーイ・サット仏は威力あるために自ら台座を離れてチュローイ・バン・レアットで消えてしまい、仏像が通った跡はプレーク・セウ Prek Sev という川になって今日まで残っているともいう [6:191-193, 17:247-249]。(2)亥年(1779年)に、ターク・シン Tak Sin が、シャムの度々の侵攻にも関わらず、カンボジアの王族が絶えないのは、カエト・ロンヴェークのトロラエン・カエン仏とネアク・ター・クレアン・ムアンのためであると考え、この2つを奪い取るよう命令を出す [17:683-684]。シャム軍のカンボジア侵攻中にターク・シンが発狂したというのは有名なエピソードだが、これをV J版では、トロラエン・カエン仏とネアク・ター・クレアン・ムアンに対して悪意を抱いたせいであると説明する [17:689-690]。

2人の怪僧のエピソードは、バンコク写本、ムーラ訳にも現れる。バンコク写本では、サカ暦1512年寅年(1590年)にシャム王チャウ・

ノレース Cau Noress が2人の怪僧を送り込み、彼らはサカ暦1513年卯年(1591年)にアタラス仏を4体とも焼き捨てたという [16:78-79]。ムーラ訳は1582年の事件として、同様のエピソードを記す [13:51]。このアタラス仏とはトロラエン・カエン仏のことであろう。

年代記各写本に共通して、ロンヴェークのトロラエン・カエン仏がチャン・リエチエの建立によるものとされている。トロラエン・カエン仏は、ロンヴェーク土城壁の中央寺院に置かれた、異様な姿の仏像である。トロラエン・カエン寺自体がアンコール期の遺構の上に乗っており、何らかの不思議な力を秘めた場所として扱われていたのであろう [19:51]。V J 版では、王城の守護像として、さらにカーイ・サット仏とネアク・ター・クレアン・ムアンが付け加わっている。

#### 1-5-2. ウドンの聖山プノム・プレア・リエチ・トロアプ

『伝承集成』に採録されている伝承によると、ウドンの聖山プノム・プレア・リエチ・トロアプ Phnom Preah Reac Troap の山頂に北向きの大仏殿を建てたのは、中国人であるという [7:68-73]。しかし、プノム・プレア・リエチ・トロアプの起源に関するV J 版の記述は、以下の通りである。チャン・リエチエ王は、ソムラオン・トン Somraong Ton のプノム・プレア・リエチ・トロアプで、ある満月の夜、異常に明るい光が東空に動くのを見た。そこで王は山に登り、供物を奉げ、山の頂上に寺院を建てることを誓った [6:130-131,17:167]。1533年巳年、王は寺院と高さ18ハット hat の巨大な仏像を作らせた。これをアタラス Adtharas 仏といい、北に顔を向けて、南の山頂に置かれた。東の山頂にも、寺院と涅槃仏、両脇のアラハン像を作らせた。アタラス寺の東にスラツ・プレア・トワマケー池を掘らせ、ワット・プレア・トワマケー寺院を建てさせた。プノム・プレア・リエチ・トロアプの西にも別の池を掘らせ、菩提樹の木を植え、スラツ・ポー(菩提樹の池)と名づけた [6:150,17:191]。ムーラ訳にも同様のエピソードが記述されている [13:43-44]。

さらにV J版では、亥年1623年に、チェイ・チェッタ王がプノム・プレア・リエチ・トロアプに王族の遺骨を納めるチェデイを建て、山頂に多くの御堂を建てさせたという [10:147-148, 17:362-364]。ガルニエ訳およびバンコク写本には、チャン・リエチエ王が、プレア・リエチ・トロアプ山頂に、涅槃仏と石の大仏を建てたという記述がある [5:349,16:75]。すなわち、年代記各本に共通して、プノム・プレア・リエチ・トロアプ山頂の涅槃仏と大仏建立を、チャン・リエチエ王の事績としている。

### 1-5-3. ウドンの寺田開発

1996年12月に行った現地調査の結果、ソヴァンナカオト Sovannakaot<sup>(14)</sup>王によって、プノム・プレア・リエチ・トロアプの北東に分布するワット・チェデイ・トメイ Vat Cedei Thmei、ワット・パデマコー Vat Pademakor、ワット・スバエン Vat Sbaeng、ワット・ヴィヒア・ルオン Vat Vihear Luong、ワット・チャド・トス Vat Cado Tos、ワット・ヴィヒア・ソムノー Vat Vihear Somno、ワット・コツ Vat Koh、ワット・ター・サン Vat Ta Seng、ワット・アンプル・ベイ Vat Ampil Bei の諸寺院が寺田を持つことが許されたという伝承を得た [19: 54-55]。

ムーラ訳とV J版では、プノム・プレア・リエチ・トロアプ北東の寺田を開いたのは、チャン・リエチエ王の事績とされている。山の上に大仏と涅槃仏を建てた後、王は山の北に池を掘らせ、クオイ Kuoy 族の鉄鍛冶を置き、ブン・プサー・ダエク Bung Phsar Daek (鉄市場の池) と呼ばせた。王は山の北東にも池を掘らせ、青銅の鋳物師たちを住まわせ、ブン・ソムルット Bung Somrut (青銅の池) と呼ばせた。王はブン・ソムルットから河まで乾季田を開墾させ、河の岸には王の船小屋を建てさせ、ストウン・ローン・トゥーク Stung Rong Tuk (船小屋の川) と名付けた。さらに、ポー・オラム Po Oram 別名ポー・オラル Po Oral の村に雨季田を開墾させ、寺院に献上した [6:151,13:43-44,17:191-192]。このエピソードは、ガルニエ訳、バンコク写本にはない。

## 1-6. 小括

トンレ・サーブ南西岸に現存する口承伝承と共通するエピソードは、主にロンヴェーク王都の建設者チャン・リエチエ王、ウドン王都の建設者チェイ・チェッタ王の事績として、年代記の記述中に現れる。それ以外の王に関する記述には、この地域の口承伝承と一致するエピソードはほとんど見られない。また、口承伝承と年代記で一致するエピソードは、ポーサット、バリボー、ロンヴェーク、ウドンの大寺およびネアク・ターの縁起、新田開発である。また、ネアク・ター・クレアン・ムアン伝承を除いて、チャン、チェイ・チェッタという名の王は口承伝承に登場しない。断定は危険だが、これらの伝承が、建都王に相応しいエピソードとして、年代記編纂に採用された可能性もまた、否定できない。

さらに、口承伝承と共通するエピソードは、V J版のみでなく、先行するノン版、ヌパラット版にも見られる。古い年代記にみられるエピソードの場合、年代記と口承伝承のどちらが先行するのかを判断することができない。しかし、後の年代記ほど伝承と共通するエピソードが増え、それ以前の物語に肉付けされていく傾向があることは明らかである。特にムーラ訳とV J版は、それ以前の年代記には見られないような、口承伝承と共通する同一のエピソードを記述する頻度が高い。従って、年代記にトンレ・サーブ南西岸地域の口承伝承が採用されているとすれば、それはV J版に独自の現象ではなく、カンボジアの年代記に共通した性格であると見なすべきである。少なくとも、V J版の編者の出身地であるために、この地域の口承伝承が採用されたというヴィッカリーの説は妥当性を持たない。むしろ、年代記各本に共通して、チャン・リエチエ王の活動範囲が、ポーサット、バリボー、ロンヴェークといった、「ブラウ・クラオム」に沿ったトンレ・サーブ南西岸地域に限られていることに注目すべきではないか [5:346-351,6:113-158,13:40-45,16:73-76,17:145-202]。さらに、トンレ・サーブ南西岸に分布する口承伝承には、シャムの侵略をモチーフとするものが非常に多いことを指摘

しておく。これはこの陸路が、16世紀以来19世紀前半に至るまで、常にロンヴェーク、ウドン王都を目指すシャム軍の侵入経路になってきた史実によると考えられる。すなわち、年代記の記述および現存する口承伝承のモチーフにおいて、ロンヴェーク、ウドン王都と「ブラウ・クラオム」に沿ったトンレ・サーブ南西岸地域は、緊密な関係を持つ、一つの圏域を成しているということができよう。

## 2. ヴィッカーリー説の再検討

### 2-1. プレ・ノン年代記

ヴィッカーリーが、現存する年代記の原型として、「プレ・ノン年代記」の存在を想定する論拠は以下の通りである。

(1) ノン版のガルニエ訳前文には、編纂を命じたアン・チャン三世の言葉として、「古代の王たちから祖父までの年代記は失われてしまった」と書かれている。これをヴィッカーリーは、アン・チャン三世の祖父であるウテイ Uday 治世 (1758~1775年) までの年代記が存在したことを意味すると解釈する [18:45]。しかし、マック・プアンによると、ノン版の前文には、「古代からの年代記は、板の宮に住んでいた祖父の治世までしか残らなかった」と書かれており、マック・プアンはこの「祖父」を、アン・チャン王の祖父ウテイ・リエチエ Udayaraja (位1758~1776年) ではなく、スレイ・トワマ・リエチエ Sri Dhammaraja II 世 (位1738/9~1747/8年) に比定する [11:9]。

(2) ノン版のタイ語訳には、sara: sabda ma: horatin nai というフレーズがある<sup>(15)</sup> [18:46-50]。このフレーズは、ニピエンナボット、アン・チャンI世 (1553年)、パロム・リエチエ (1566年)、ソター (1576年)、ロヴェーク落城後にクメールの支配が復活して以来、1738年のトワマ・リエチエまでの諸王の即位式に見られるが、ニピエンナボットからアン・チャンの間は、ポニエ・ヤート、トワマ・リエチエI世のような重要な王にさえも見られない。そこでヴィッカーリーは、このフレーズが出現する部分は1つのまとまりで、ノン版以前、恐らくは1738年直後に作られたものであると推論する。

(3) ノン版には、「ロヴェークで統治した王に関しては、これが物語の終わりである」という一文がある。ヴィッカリーは、ロヴェークの最初の王はアン・チャンであるので、この文は、年代記が本来16世紀のアン・チャン王治世から始まったことを示唆するものであると考える。この説を補強する論拠として、ソター王治世中の記事に、「王の祖父、父の習慣によって認められた」という言い回しがあることを取り上げ、これは1つの王朝の伝統が、ソター王の祖父であるアン・チャンまで溯ることを示しているとする [18:82]。

(4) 1170断片別名『ロヴェークの歴史』は<sup>(16)</sup>、明らかにソター王と比定できる王の治世から始まる。この王は「祖父祖母から父母の時以来」の家系の子孫と記されており、ヴィッカリーはこれが「王朝の創始者はソターの祖父アン・チャンで、歴史記録は彼から始まる」という意味であると理解する [18:203]。

以上の4点から明らかなのは、ノン版に先行して、①16世紀のロンヴェークの始祖あるいはソター王の祖父に始まる記述のまとまりと、②18世紀中葉のトワマ・リエチエに終わる記述のまとまりが存在したことである。しかし、これら4点は、チャン・リエチエ以前に関する年代記の記述が、本来は存在しなかったと決定するだけの根拠とはなりえない。例えば、ノン版諸写本には、1739/40年～1783/4年の欠落が見られる [11:10]が、ノン版より後に編纂された年代記諸本は、記述の大部分をノン版に拠りながらも、ノン版が欠落している部分は別の史料に拠って記述している。同様に、ノン版の史料となった「プレ・ノン年代記」が複数であり、他に、ニピエンナボットからチャン・リエチエの兄のソコンナボットまでを記述する年代記のまとまりが存在した可能性を否定するだけの根拠が存在しないからである。

## 2-2. アン・チャン治世以前に関する記述の信憑性

ヴィッカリーがアン・チャン以前に関する年代記の記述は虚構であると判断する論拠は、以下の通りである。

(1) 先に述べた *sara: sabda ma: horatin nai* というフレーズ



の分布が、ニピエンナボットとアン・チャンが、本来連続していた証拠となる [18:88]。

(2) ノン版のテキスト分析の結果、ソリヨヴォン Suriyovans 治世とトワマ・リエチエ治世に矛盾が見られる [18:87-88]。

a: ソリヨヴォンは父方のおじロムボン Lamban を継承したことになるが、ロムボン治世にはシャムの侵略があり、その後3人のシャム王子がアンコールで統治したことになる [18:50-54]。

b: ポニエ・ヤートの息子トワマ・リエチエ王の誕生年は、ヤートの譲位後14年で、若く見積もっても、ヤートが89歳の時に誕生した息子ということになり、年代記の記述を引き伸ばした結果として生じた矛盾であると考えられる [18:60-61,88]。

(3) ヴィッカーリーは、アン・エーン断片<sup>(17)</sup>の最初の王 Mahanibhar を、名前の類似から、ノン版のニピエンナボットに比定する。そして、Mahanibhar の治世年の干支が戌、亥、子、丑、寅年であり、戌年に即位し、寅年に死亡したアン・チャンと「パラレル」を成すと強調する [18:168-171,197-199]。しかしながら、干支の一致は、治世全体が「パラレル」であるとする根拠としては不十分であろう。

(4) ヴィッカーリーによると、アン・エーン断片の Gamkhat、Gam Yat (ポニエ・ヤートに比定) は、16世紀末に実在したリエム・チューン・プレイ Ram J'on Brai と「パラレル」であるとされる [18:190-192]。その根拠は次の通りである。

a: 3人とも先王を殺して妻を奪った。しかしマック・プアンは、シャムから帰国し、兄王と戦って王位に就いた19世紀のアン・ドゥオンを引き合いに出し、Gamkhat とリエム・チューン・プレイだけが「パラレル」ではなく、「兄殺し」という点に注目するならば、リエム・チューン・プレイとアン・ドゥオンも「パラレル」の要素を持ちうると批判している [11:21-24]。

b: 3人ともがシャムの侵略を追い払い、ramadhipati というタイトルを持っている。しかし、王のタイトルに使われる語彙は限ら

れているため、タイトルが一致する王は、18世紀後半のリエミアトウパテイ・アン・ノン Reameathipdei Ang Non など、他にも存在する。

c: ポニエ・ヤートはスレイ・サントー Srei Santhor に遷都したが、リエム・チューン・プレイの都もスレイ・サントーである。他方アン・エーン断片では、Gamkhat と Gam Yat の双方がプノンベンに関係している。しかし、これはヴィッカーイーが想定するような、リエム・チューン・プレイと Gamkhat のパラレルを示す根拠とはならない。

d: アン・エーン断片では、Gamkhat の活動を次のように記述している。Gamkhat はアユタヤ討伐を思い立ち、まずチャンタブリ Candapuri を攻めて多くの捕虜を取った。しかし、インド人とチャム人の首長たちが Muan Caturahmug (プノンベン) を攻め、金と銀の仏像を奪い、Gron Brah Bej (不明) に迫った。Gamkhat は Nagara Hlvan (王都) に戻り、Nan Brah Dharani (不明) の加護を得て、水軍戦でチャム人を撃退し、敵の遺体が Brah Bej 運河に満ちた。続いて、Gamkhat は弟の Kev Fa にアユタヤ討伐軍を指揮させた。Bisnuloka (アンコール) に着くと、町の南東に vihara を建てた。さらにアユタヤ国境に進んだが、戦わずに Bisnuloka 近辺に戻った。ここに Muan Ramyapuri を建てて、Kev Fa を知事に任命した後、自分の王国に戻った [3:77-78,18:180-182]。

ヴィッカーイーは、Gamkhat の活動の地理的範囲は合理的ではないが、これを16世紀末のリエム・チューン・プレイと読み替えた場合、チャムと戦うために首都からプノンベンに行き、その後、故郷に戻り、アユタヤ攻めの途上にアンコールに止まるのは合理的であるし、彼がシャム追討作戦をチャンタブリまで展開していけない理由はないと言う [18:191]。しかし、ヴィッカーイーが Gamkhat の活動の地理的範囲が合理的でないとは判断する理由、リエム・チューン・プレイならば合理的であると判断する理由は、全く説明されていない。しかも、ヨーロッパ人による同時代史料には、リエム・チューン・プレイがアユタヤ討伐、チャンタブリ討伐を行ったという記述

がない [22]。

このように、ヴィッカリーの「パラレル」の議論は説得力に欠ける。しかし、ヴィッカリーの論証の誤りを指摘したところで、16世紀以前に関するカンボジア年代記の記述の信憑性が肯定されたわけではないことに注意しなければならない。(2)に見られるように、クロノロジーやテキストの矛盾は確かに存在するからである。

### 2-3. アン・チャン治世の信憑性

ヴィッカリーがアン・チャン治世の信憑性を補強する同時代史料として挙げるのは、碑文とガスパール・ダ・クルス Gaspard da Cruz の記述である。

#### 2-3-1. アンコール・ワット浮き彫り碑文 (the late bas-reliefs of Angkor-Wat)

この碑文は、未完の浮き彫り 2 点を 1546 年、1564 年に完成したことを記したもので、①1546 年に *brah pada stac brah rajaonkara parmmarajadhiraja*、②1564 年に *vrah pada samtec vrah rajaonkara parmmarajadhiraja*、③1546 年に *ramadhipati parmmacakarabartt[i]raja ta parmmapavitra* という王名が現れる。セデスは、これらが 1 人の王か、2 人の王のものか不明であったが、ヴィッカリーは、もしこれらが単一の王を示すものであれば、クロノロジーはアン・チャン王に相当すると指摘する。さらに、この碑文に見られる王のタイトルは、タイ語訳ノン版に現れるアン・チャンのタイトル、*brah pada samtec brah paramarajadhiraja ramadhipati sri suriyopabandhu dharmmikaraja* とも一致し、年代記が 16 世紀の史料を基礎としている証拠であると評価する。さらに、1540 年以降に「カンボジアの支配者」がアンコールに居たということは、この時期にアン・チャンがアンコールでシャムの侵略を撃退したという年代記の記述とも整合すると指摘する。その他、この碑文では、アンコール・ワットを建立した王 *brah/vrah pada mahavisnuloka* への言及があるので、これは 16 世紀半ばのカンボジア宮廷が、アン

コール時代の真の情報を保存していたことを示す根拠になるとも言う [18:227-228]。

ヴィッカーリーがこの碑文の王をアン・チャンに比定する根拠は、①碑文の年代が年代記のアン・チャン治世に合う、②碑文と年代記のタイトルが類似する、の2点である。これらは、碑文の王が1人で、かつ年代記のアン・チャン治世のクロノロジーが正確であることを前提とした議論であり、逆に年代記のクロノロジーを補強するものとは言えない。年代記と碑文の王のタイトルで一致するのは、paramarajadhiraja と ramadhipati の2語のみである。王のタイトルに使用される言葉は非常に限られており、これは両者が同一人物であるとする決定的な証拠にはならない。さらに、碑文中のアンコール・ワット建立者、brah/vrah pada mahavisnuloka 王が、実際の建立者であるスールヤヴァルマン Suryavarman II 世を示していると考えられる根拠はどこにもない。

### 2-3-2. コムボン・チャーム Kompong Cham のワット・ノコー Wat Nokor 碑文

1566年のこの碑文を、ヴィッカーリーは「アン・チャン治世に関わる直接の証拠」であり、「年代記の記述と一致する」として、「アン・チャン碑文 the Ang Cand inscriptions」の名で呼んでいる。

この碑文のパーリ語部分最初の2行、Sogandhapada…と Mahapar [amma] nibbanapad を、フィリオザ Filliozat は二重の諡であると解釈した [4]。ヴィッカーリーは、これらが年代記の最初の王ニピエンナボットとアン・チャンの兄ソコンナボットに類似すると指摘する。この碑文のクメール語部分では、寅年、1566年に、sri saugandhapad というタイトルの高官 samtec okña が、仏塔と寺院を建てたと記されている。ヴィッカーリーはニピエンナボットとアン・チャンが「パラレル」であるという自説を持ち出し、1566年は年代記上のアン・チャンの死亡年なので、碑文がアン・チャンの葬儀の記念碑で、ニピエンナボットはアン・チャンの諡であると解釈する。クメール語部分の saugandhapad は、パーリ語の sogandhapada

と同一であり、年代記のソコンナボットに一致する。従って、ヴィッカーリーは *sogandhapada* が諡であるというフィリオザ説を斥け、パーリ語部分を *Mahaparammanibbanapad* 王の息子 *Sogandhapada* と理解する [18:229-233]。

ヴィッカーリーがこの碑文をアン・チャン碑文であるとする根拠は、①年代記上のアン・チャンの死亡年1566年と、碑文のワット・ノコーの建立年が合うこと、②彼が主張する、ニピエンナボットとアン・チャンの「パラレル」だけである。この「パラレル」が決定的でないことはすでに述べた。この碑文中には王の死に関する記述は無い。また、1566年に *samtec okña sri saugandhapad* が仏教施設を建立したことは、その年に王が死去した証拠とはならない。さらに、ヴィッカーリー自身も *samtec okña* のタイトルが王では有り得ないというジャックの説を引いているが、このタイトルが在位の王の子に付されている例も見つかっていない。従って、ニピエンナボットとソコンナボットが父子であるという解釈の妥当性も疑問である。この碑文は、年代記の記述を何一つ保証しない。

### 2-3-3. アンコール・ワット近世碑文 IMA4

この碑文を、ヴィッカーリーは先のワット・ノコー碑文とともに、「アン・チャン碑文」の一つとして扱う。

ヴィッカーリーはこの碑文中に記されたヴィヒア *vihara* の建設期間、「卯年 *akña on* の時から、寅年 *anak brah onkar britr nirbann* の時まで」を問題とする。ヴィッカーリーは、*anak brah onkar britr nirbann* が王のタイトルで、先のワット・ノコー碑文の *Mahaparammanibbanapad* と同一人物であると比定し、「2個所の同時代碑文から、寅年1566年にクメール王が死去したか、公式に祭られた」と言えると解釈する。さらに「卯年 *akña on* の時」の卯年を1555年に比定し、年代記上のアン・チャン王治世中の大事件、オン王子がシャム軍を率いて侵略してきた件を指すとする。そして、これら2碑文は、ニピエンナボットが14世紀ではなく、16世紀の人物であることを示す史料であると言う [18:233-236]。

この碑文がアン・チャン碑文であるとするヴィッカリーの根拠は、年代記上のアン・チャンの死亡年1566年と、この碑文のヴィヒア完成の年が一致することだけである。ワット・ノコー碑文の所で述べたように、それ以前の卯年から建てていた本堂が1566年に完成したことは、必ずしも1566年の王の死を意味しない。同じ年に2個所で仏教施設が完成したとしても、それが相互に関係ある事象だということが証明できなければ、同時性に何の意味も無い。

この IMA 4 碑文は、uk-hluon Abhayaraj と anak-uk Dhamm という2人の役人とその一族が、ヴィヒアを建て、仏像に金を塗り、5体の仏像を建立し、法典を複写し、シーマー sima を打ち込み、仏像の世話のために一群の奴隷を献上したという証拠のための碑文である。アンコール・ワットに刻まれた、他の近世奉納碑文と同形式で、特別なものではない。碑文の最後は、奉納者のより良い来世への祈願で終わり、碑文中では王のことなど一片も触れられない[9:112-115]。この碑文をアン・チャン王の死の記念碑であるとするヴィッカリーの解釈は、事実の歪曲である。卯年の akña on 問題は、ヴィッカリー自身が akña のタイトルは王子に相応しくないと述べている。年代記のオン王子とは、全く関係しないと見るべきであろう。

最後に、ワット・ノコー碑文と IMA 4 が、年代記のニピエンナボットは本来16世紀の人物であったことを示す根拠となるというヴィッカリーの解釈も、説得力を持たない。これらの碑文の人物が同一人物だとしても、16世紀にニピエンナボットに類似する名の王が実在したということを示すだけである。碑文の人物が、年代記のニピエンナボットと同一人物であると論証することは、今までに提示された史料からは不可能である。

#### 2-3-4. ガスパール・ダ・クルスの記述

ポルトガル人宣教師ガスパール・ダ・クルスは、1555年から1577年にかけてカンボジアに滞在した。クルスの記述から、当時の王はロヴェークに住んでおり、また「人々が兄王に反乱し、彼がこれを

鎮圧し、彼の兄が王国を彼に譲った」という経緯を経て即位したことが分かる。ヴィッカーリーは、人々の反乱というのがコーン Kan の反乱を指すとしたら、これは年代記のアン・チャン即位に一致すると判断している [18:246]。

ヴィッカーリーは「ヤートに続き、幾つかの史料が一致して、反証が無いのがアン・チャンの兄の治世である。同時代史料であるガスパール・ダ・クルスは、アン・チャンに兄がおり、反乱で位を降ろされたと記す [18:494] と、クルスの記述するカンボジア王がアン・チャンであることを疑っていない。その根拠は、①クルスの滞在年、1555年～1557年は年代記上のアン・チャン治世中に当たる、②クルスは当時の王が兄王治世の反乱を鎮圧して王位に就いたと記しており、これは年代記のアン・チャンのエピソードと一致する、の2点である。第一の根拠は、年代記のクロノロジーが正しいことを前提としているが、年代記のアン・チャンのクロノロジーが正しいことを保証する根拠はない。第二の根拠は、年代記に記述されたアン・チャンのエピソードの1つを裏付けるのみであり、年代記とクルスの記述の間にも不一致がある。年代記では、兄王は叛徒コーンに殺されてしまうが、クルスの記述では、その生死は明確でない [21:51]。クルスの記述が示しているのは、16世紀中葉のロンヴェーク王は、兄弟が連続して即位し、両者の治世の間には大きな内乱があったということだけである。クルスのカンボジア滞在はわずか1年程で、アン・チャン治世全体を保証するような証拠にはならない。さらに、クルスの記述する王が、先の3碑文の王あるいは王たちと同一人物であるという証拠も無い。

#### 2-4. 小 括

ヴィッカーリーが指摘するように、現存の年代記に先行して、16世紀のロンヴェーク王都の建設者あるいはチャン・リエチエ王から記述を始める年代記のまとまりが存在した蓋然性は非常に高い。しかしながら、これ以前の時期に関する年代記の記述は「ブレ・ノン年代記」に基づかない創作であるという説は、説得力に欠けるものと

判断せざるを得ない。同時代史料に欠ける現在の状況では、明らかなクロノロジーやテキストの矛盾は指摘できても、それ以外の年代記の記述については、史実であるとも、虚構であるとも決定することはできない。従ってチャン・リエチエ王に関する年代記の記述も、それ以前の王たちの治世同様、事実であるという保証はできない。同時代史料である碑文やクルスの記述から明らかなのは、(1) 1566年に、名あるいは諡がニピエンナボットという王が、コムボン・チャームとアンコールの碑文で言及されていること、(2) 1555～57年の「カンボジア王」はロンヴェークに居て、反乱で退位した兄王の跡を継いで即位したことだけである。

## 結 論

年代記の記述とトンレ・サーブ南西岸地域の口承伝承を比較し、ヴィッカリーによる年代記の史料的価値に関する議論を再検討した結果、以下の結論を得ることができる。

カンボジアの年代記には、明らかに口承伝承と共通する記述が見られる。また、後代に編纂された年代記ほど、現在の口承伝承と共通するエピソードが増大する傾向にある。しかし、それは年代記に記述される物語の粗筋に変更を加えるようなものではなく、旧来の粗筋は一貫して保存されている。また、トンレ・サーブ南西岸地域の口承伝承と共通するエピソードは、主に、ロンヴェーク、ウドン王都の建設者であるチャン・リエチエ王、チェイ・チェッタ王の事績として、年代記に現れる。そして、大寺やネアク・ターの縁起、新田開発に関わる伝承だけが、年代記の記述と共通している。以上のことは、建都王に相応しい伝承のみが選択されて、年代記の編纂に採用されていった可能性を示す。しかしながら、これらは一見して伝承であると判断できるような超自然的なエピソードではなく、テキストにも矛盾は認められないので、ヴィッカリーの方法では抽出することができない。

14～16世紀に関する年代記の記述が、「プレ・ノン年代記」に基づかない虚構であるとするヴィッカリーの主張は妥当性を認められ



ないが、同時代史料が存在しない以上、この時代に関する年代記の記述をそのまま史実として受け入れることは、非常に危険である。だからといって、年代記の史料的価値は否定されるべきではない。なぜなら年代記は、フランス植民地期に、近代的な歴史学に拠った「カンボジア史」が導入される以前に、ウドン・プノンペンの王権によって完成された歴史叙述であり、その形式・内容は、VJ版のように、近代的な「カンボジア史」が形成された後に編纂された年代記でも保持されているからである。むしろ積極的に、年代記そのものを対象とした研究がなされていくべきではなかろうか。

表. 1999年2月採集の口承伝承

地名	採集地	伝承	日付	インフォーマント	地誌の記述
Baribor	Vat Preah Vihear Luong	Preah Ong Preah Phnol 仏 シャムから帰国した王 Prei Ngongui Tuk Ngo Conghan Hoy Pol Preah Siem Kier(シャムによる連行) 砦	990206	Phlong San、男、 66-67歳 Huot Seng、男、 62歳	砦
	Vat Melom	砦	990206	Nal、男、45歳 Kroc Yon、男、62 歳	
	Vat Ain Tep	Pol Preah Preah Ong Preah Phnol 仏 Tuk Ngo Conghan Hoy 砦 Tae Ong (オンのお茶) Baribor の起源	990209	Heng Pat、男、 70歳	
Krakor	Vat Bopphea Sovann		990206	Nuon N̄ean、男、 38歳	
	Vat Proset Ker	Arong Pruoc と Banteay Krong に砂岩の仏像が漂着 シャムと戦うために魔法薬を 飲んだ池、Bung Ta Aek Phluv Khsae Luos 道 Phluv Luong 道の Ondong Seila (石井戸) Neak Ta Khleang Muang 砦 Kut Neak = Ku Neak の 隻 眼の竜	990206	Kruoc Khen、男、 83歳 Pac Pon、男、60歳	

Posat	Neak Ta Khleang Muang	Neak Ta Khleang Muang Ba Kan 王宮	990207	Sae Mon、男、61歳	
	Vat Po Mean Bon	Ba Kan に流れていった菩提樹 Okña Khleang Muong に捕らえられたシャム王子 Neak Ta Preah Cau 砦 王子の死体を埋めた Prasat	990207	Tuc Naem、男、66歳 Sdaung Khin、男、68歳	菩提樹 砦と人柱
	Phteah Ta Naem	砦	990207	Sdaung Khin、男、68歳	
	Vat Luong	王の ceday 砦 Neak Ta Khleang Muang	990207	Phat Luang、男、68歳	AngDuong 建立
	Vat Veal		990207		
	Vat Ba Kan	Prasat	990207		菩提樹が漂着
	Vat Prek Sdei	フランスがダムを造って川の流れを変えた	990207	Neu Sokun、男、46歳	
	Vat Peal Ñaek	Domrei Popeal (白子の雄象) と Prei Ñi (雌象の森) Hanuman と Siem Reap の Phnom Kraom	990208	Uon Tuc、男、66歳	Peal-Nhek Prey-Nhi
	Vat Noti Mongkol	砦	990208	n.d.	
	Vat Noti Sedtha	Tae Ong 砦 Siem Kier シャムと戦うために魔法薬を飲んだ池、Bung Tram Pol または Tream Pol フランス時代 Sway Don Kaev の国境での対シャム戦	990208	Chum Poy、男、69歳 En Kong、男、76歳	砦
	Vat Po Rangsei	Prek Ponlec Siem(シャムが沈んだ水路) Phum Phluv Luong Veang Boran(旧王宮) シャムと戦った時の Baek Khael (橋が割れる)	990208	Nut Leak、男、56歳	
	Vat Preah Theat	Prasat 跡、砂岩の円柱	990208		王の母の遺骨
	Vat Banteay Dei	砦 Domrei Popeal Prei Ñi Khleang Muang がシャムの王子を捕らえた Ba Kan 王宮と Sdec Reac	990208	Ros San、男、66歳	砦

		Noreac 王の一族 Vat Preah Theat と王女 の遺骨 Siem Kier に遭った王女 タバコに中って死んだ王 子			
	Vat Suriya	Khleang Muang 砦	990208	Phok Khut、男、87 歳	

この調査は、文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）によって行った。調査に当たって、日本国政府アンコール遺跡救済チームのスタッフ Him Dara とプノンベン大学史学科教授 Treng Lim の協力を得た。

### 引用文献

1. Aymonier, Etienne. 1900. *Le Cambodge*. Vol.1. Paris.
2. Caillarg. 1905. *Monographie de la province de Kompong-Chhnang*. INDO-RSC-00236.
3. Coedès, George. 1989. *Articles sur le pays khmer*. Paris.
4. Filliozat, Jean. 1969. Une inscription cambodgienne en pali et en khmer de 1566 (K86 Vatt Nagar). *Académie des inscriptions et belles-lettres. Comptes rendus des séances de l'année 1969*. pp. 93-106.
5. Garnier, Francis. 1871-72. *Chronique royale du Cambodge*. JA. 18-67. pp.336-385. & 20-2. pp.249-289.
6. Khin Sok. 1988. *Chroniques royales du Cambodge (De Baña Yat à la prise de Lanvaek)*. Paris.
7. Krom Comnom Tomniem Tomloap Khmaer. 1990. *Pracom Ruang Preng Khmaer*. 5.
8. Krom Comnom Tomniem Tomloap Khmaer. 1994. *Pracom Ruang Preng Khmaer*. 8.
9. Lewitz, Saveros. 1971. Inscriptions modernes d'Angkor 4, 5, 6, et 7. *BEFEO*. pp.105-123.
10. Mak Phoeun. 1981. *Chroniques royales du Cambodge (De 1594 à 1677)*. Paris.
11. Mak Phoeun. 1995. *Histoire du Cambodge de la fin du XVIe siècle*

au début du XVIIIe. Paris.

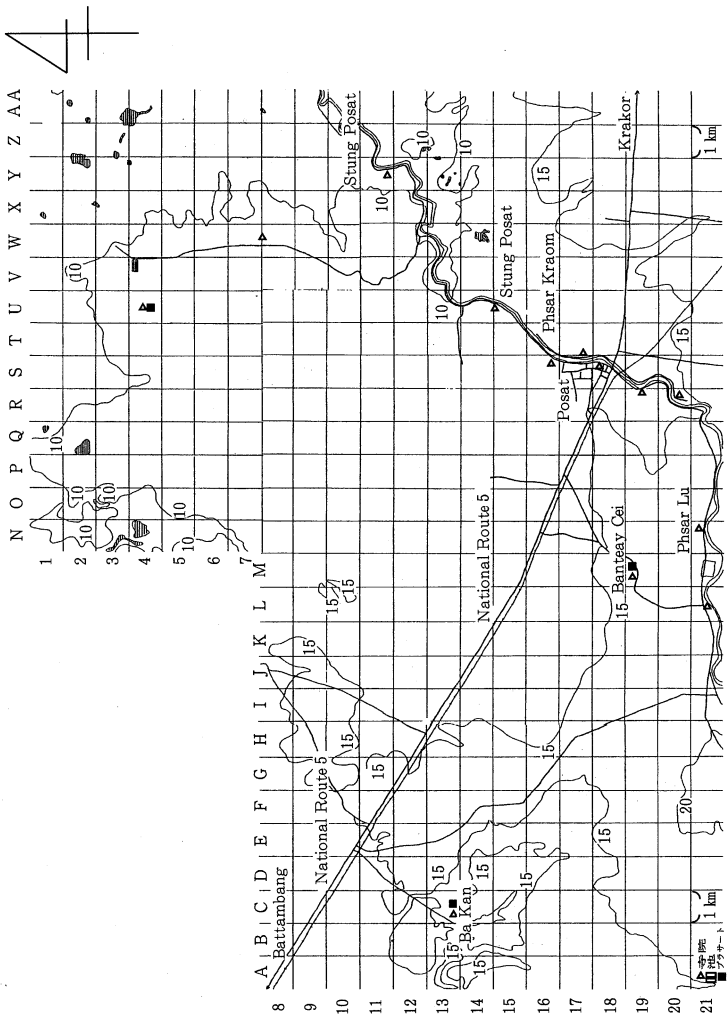
12. *Monographie de la province de Pursat*. 1906. Saigon.
13. Moura, Jean. 1883. *Le royaume du Cambodge*. Tome 2. Paris.
14. Pavie, Auguste. 1884. *Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam*. Saigon.
15. Porée-Maspero, Eveline. 1961. Traditions orales de Pursat et de Kampot. *Artibus Asiae*. 24. pp.394-398.
16. *Preah Reac Pongsavadar*.
17. *Preah Reac Pongsavadar Moha Khsatr Khmaer*.
18. Vickery, Michael 1977. *Cambodia after Angkor, The Chronicular Evidence for the Fourteenth to Sixteenth Centuries*. Ann Arbor.
19. 北川香子。1998年。「ポスト・アンコールの王城—ロンヴェーク及びウドン調査報告」『東南アジア—歴史と文化』27。48～72頁。
20. 北川香子。2000年。「水王の系譜—スレイ・サントー王権史」『東南アジア研究』38-1。50～73頁。
21. クルス、ガスバル・ダ。日笠博司訳。1987年。『十六世紀華南事物誌』東京：明石書店。
22. モルガ、アントニオ・デ。神吉 敬三/箭内 賢次 訳。1966年。『フィリピン諸島誌』大航海時代叢書7。東京：岩波書店。

## 註

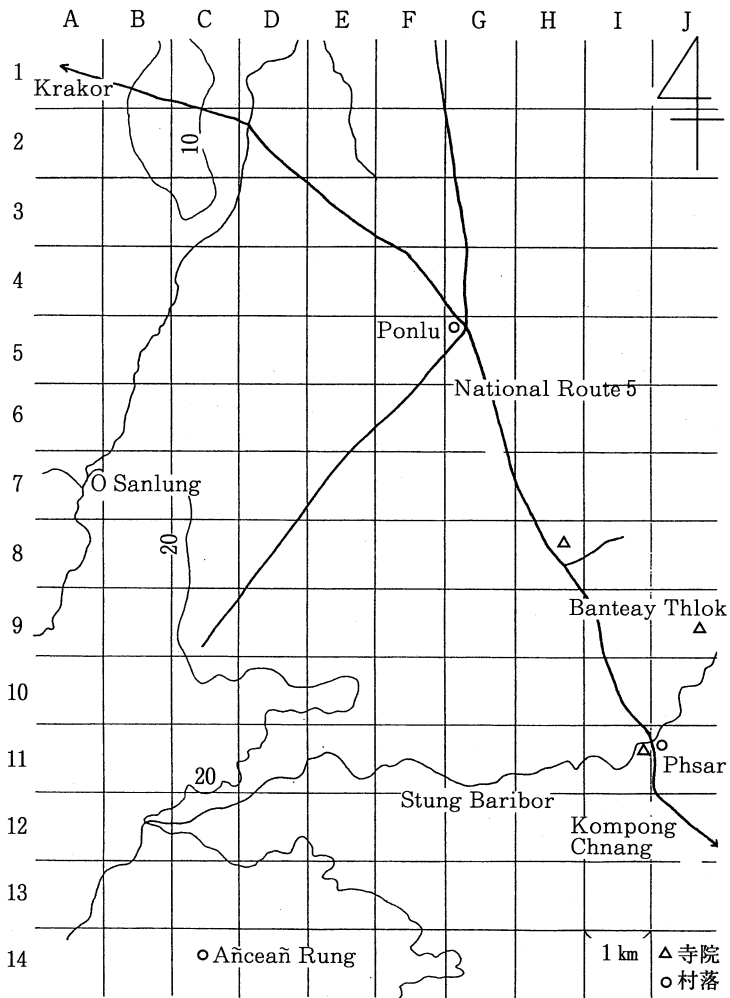
- (1) 通常1431年から1863年を指す。前者は年代記V J版に現れるアンコール放棄の年であり、後者はフランスによる保護領化の年である。
- (2) 以下の解題はマック・ブアンによる [11:5-14]。
- (3) 上智大学の石沢良昭教授の御好意でコピーを入手した。
- (4) 東京のユネスコ東アジア文化研究センターに保管されている写本のマイクロフィルムを使用した。
- (5) 【M地図番号:地図上の位置】
- (6) サカ暦で表された年代は、西暦—78/79年に相当し、カンボジアではノロドム王の治世(1860～1904年)まで使用された。アユタヤの領域でも使用されたが、16世紀末にはチュラ cula 暦に代わった。チュラ暦で表

された年代は、西暦-638/639年に相当する [18:7]。

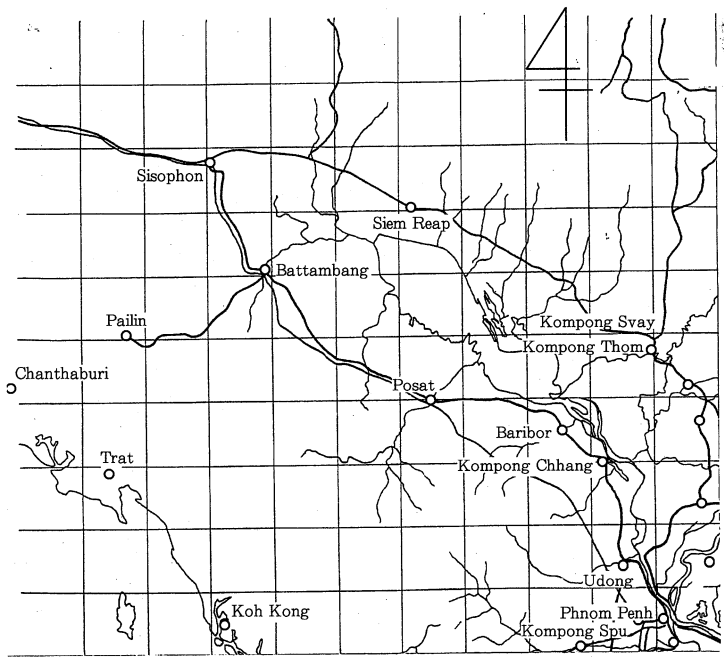
- (7) 筆者がネアク・ター・クレアン・ムアンで採集したのと同じ伝承は、ボレ・マスペロ Eveline Poree-Maspero 夫人も採集して1961年に出版しており [15:394-395]、また『伝承集成』にも採録されている [8:1-19]。
- (8) コーンについては [20] 参照。
- (9) 高さ18キュービット (8.37m) の仏像。
- (10) プサーはバリポーの中心地である。
- (11) この他、ポーサットのワット・ポー・ミエン・ボン南西には、クメール軍に捕らえられ、ネアク・ターに化したシャムの王子の伝承がある。
- (12) ヴィツカリーによると、胴体は木造で足だけが石造という仏像は、非常に稀である [18:68]。
- (13) エモニエによると、ロンヴェークのネアク・ター・クレアン・ムアン neak Ta Klang Moeung 像は、町の中央にあり、貧弱な藁屋根に守られたガネーシャ Ganes'a 像であった [1:224]。
- (14) ソヴァンナカオト (黄金の骨壺) はノロドム王の諡であるが、今回採集した口承伝承では、ノロドム王はノロドムの呼称で示され、ソヴァンナカオトはノロドム王とは別の王として語られている。
- (15) ヴィツカリーは、このフレーズは、現代クメール語、タイ語では意味が失われているので、オリジナルのテキストにあったものが、意味も分からず複写されたのではないかと想定する。
- (16) この断片は、シャム語訳しか存在しない。その序文によると、元となったクメール語のテキストは、ソムダチ・ブレア・アン・カエウ Samtec Brah Ang Kaev というタイトルを持つクメールの高官によって、チュラ暦1170年、すなわち1808年に、バンコクの宮廷に与えられた。この写本はタイの年代記集成 Pra: jum bangsavatar 中において、『ロヴェーク年代記 Bangsavatar la: vaek』の名で出版されている [11:6-7]。
- (17) 1796年にアン・エーンがシャム王に与えた写本であり、現在知られている限り、最古のカンボジア年代記である。写本としては、シャム語訳しか現存しない。1918年にはセデスによってフランス語訳が作成された。内容的には14世紀半ばから15世紀半ばまでを記述する [11:6]。



地図1 ポーサット周辺



地図2 バリボー周辺



地図3 トンレ・サープ周辺